

## 輔仁カトリック大学臨床実習報告書 # 1

日曜日:桃園空港に学生が迎えに来てくれました。SIM フリーの携帯を持参したので、空港でSIM カードを購入しました。電話番号付き、30 日で 1000 元ほど。電話は無料通話分があらかじめいくらかついていました。学生が大型タクシーを手配してくれており、寮まで移動しました。夕方から、今回の実習で関わってくださる先生との食事会がありました。学生が 4 人、先生が 3 人いらっしゃいました。

### 一週目 (5/5~9) : 國泰綜合醫院

・ 國泰病院は保険会社や銀行などを経営する大きな会社が所有する病院です。汐止というところに分院があり、私たちはその分院の寮に宿泊しました。國泰病院にも寮があるそうですが、分院の寮の方が新しく快適だそうです。汐止分院と國泰病院間は 30 分おきにシャトルバスが出ており、約 30 分で到着します。私たちは 8:30 のバスに乗っていました。

・ 向かいのビルに事務所があり、そこでロッカーと机が各人一つずつ割り当てられます。そこで白衣に着替えます。更衣室はないので、Tシャツの上から白衣を着ました。朝ごはんは、汐止の寮の近くで食べたり、國泰病院の近くのパン屋で買って自分たちの机で食べたりしていました。昼ごはんは、病院で弁当が無料で支給され、学生と一緒に院内内の 3 階の学生用控え室で食べました。夕方は、学生がいろんなところに連れていってくれました。帰ってくるのは早くて 20 時、遅い時は 11 時過ぎでした。20 時まではシャトルバスがありますが、それ以降は MRT と電車を使用します。



【シャトルバス乗車場所】



【支給されるお昼のお弁当】

・ 私は胃腸科を選択しましたが、肝臓内科に所属になっており、主に慢性 B 型肝炎の症例について学びました。台湾では、HBV キャリアが人口の 15-20%とかなり多いそうで、最近では予防接種によって若年者でのキャリアは少なくなって来ているそうです。台湾では、中医学で処方される漢方によって薬剤性肝炎を起こす例も多いとのことでした。

・ 肝臓内科以外にも泌尿器科や心外のオペを見学することができました。オペ室へも学生が案内してく

れました。オペ室は、設備がやや古いほかは佐賀大学病院と特に大きな違いはありませんでした。更衣室のロッカーは鍵がなく、学生が共同で使用しているものだったので、貴重品などは手元に持っていました。

・寮は4人部屋でしたが、ルームメイトは1人だったため、広々と使用できました。2段ベッドが2つ、机、クローゼットがあります。トイレ、シャワー、洗面所がある場所は隣の部屋とつながっていて、共有スペースとなっています。歯ブラシとコップ、石鹸、スリッパ、洗面器は新しいものを貰えました。トイレットペーパー、足ふきマット、タオル、シャンプー、洗顔料は持参しました。ハンガーは3つほどありました。洗濯機、乾燥機は無料で使えます。洗剤は持って行きました。

#### 土曜日:移動

9時ごろに学生が来てくれて、電車とタクシーで移動しました。電車の駅までは徒歩で10分ほど。荷物が多かったので段差で苦労しました。その後、OSCEを体験しに輔仁大学へ向かいました。大学へはバスを乗り換えながら約1時間の移動でした。OSCEは実際に試験をしているところに入れてもらうかたちでした。2つのブースを体験しました。内容としては、どちらも佐賀のOSCEでの医療面接に加えて、必要であれば身体診察をし、患者さんに病状・検査結果の説明をし、治療法について述べるというものでした。入室前に課題の紙が渡されるので、そこに書かれている内容のことをいくつか行います。日本語のできる学生が通訳として入ってくれたので、日本語で行うことができました。また、模擬患者さんの中には日本語で話してくれる人もいました。本当の試験ではないので気楽に体験して欲しいと言われましたが、実際に試験を受けている人を横目に見ながらの体験でかなり緊張しました。

#### 二週目 (5/12~16) :耕莘醫院

・寮は病院の敷地内にあります。女子の寮はかなり古かったです。シャワーとトイレの間に仕切りがなく、シャワーを浴びるとトイレのところの床もぬれて大変でした。ベッドのマットレスは前の週に比べて大変硬く、ほぼ板の上で寝ているような感覚でした。学生に寮で困っていることはないかと質問されたため、マットレスのことを伝えると、月曜日にはマットレスを二重にしてもらえました。部屋は4人収容できる作りで、ルームメイトは他に2人いました。支給される備品はありませんでした。洗濯機と乾燥機はありますが、こちらは10元が数枚必要でした。



【女子寮のトイレ兼シャワー室】

・家庭科の実習は、主に外来見学と僻地訪問でした。外来は中国語なので、話している内容はわからない上、付き添いの学生や先生も毎回説明してくれるわけではないので、得るものは少ない印象でした。僻地訪問では、1日目に台湾の実習生と一緒に車で移動しました。車で1時間半ほどすると、先住民の人たちが住む集落到着し、そこで先生が血圧を測ったり、薬を処方したりするのを見学しました。計3カ所の診療所を回った後、19時ごろ帰り着きました。また、3日目には車で30分ほどのところにある地域の集会所に行き、そこで住民の血圧と血糖を測定しました。これは午前中で帰ってきました。

・4日目に輔仁大学のキャンパス見学をしました。日本語文学科の院生が4人来てくれて、流暢な日本語で案内してくれました。輔仁大学は医学部と他の大学が同じ敷地内にあるため、医学部以外の所も見学できました。医学部ではOSCEセンター、PBL室、各種シミュレーターが置いてある部屋、解剖室などを見学しました。

・5日目は、午後に脳神経外科の先生からレクチャーを受けました。1人の学生が最終評価としてくも膜下出血の症例について発表し、それに関連して先生が脳血管の解剖、鑑別、くも膜下出血の治療などについてとても流暢な英語でレクチャーしてくださいました。台湾の学生は英語の教科書で勉強しているため、医療英語には慣れているようでした。

土曜日：移動

MRTを乗り換え、MRT駅からシャトルバスに乗って移動しました。周りには伝統的な市場があり、お店も多く立地はいいです。士林夜市にも近い場所です。

### 三週目 (5/19~23)：新光吳火獅紀念醫院

・形成外科をまわりました。整形外科と書いてありますが、形成外科です。整形外科は骨科のようです。手術は、皮膚の腫瘍や嚢胞の切除、創傷のデブリードマン、下咽頭癌の縫合などでした。縫合も教えてもらいました。病棟では包帯交換を行い、外来見学もしました。形成外科の先生方はみなとても親しみやすく、話好きな先生方ばかりでとても楽しく過ごせました。外来では治療後のフォロー、腫瘍や嚢胞の症例の問診や診察、慢性皮膚潰瘍の洗浄などでした。形成外科なので目に見えて分かる症例ばかりで、患者さんと医師の会話が理解できなくても困ることはありませんでした。また、新光病院では美容部門も開設されており、手術はないそうですがボトックス注射やレーザー治療などを行っています。別の階にクリニックが入っており、見学させてもらえました。

・寮はかなり快適でした。4人部屋でしたが、ルームメイトはいませんでした。シャワーとトイレは別々でした。備品は特にないです。シャンプー類とドライヤーは持っていなければ貸してくれるようです。コインランドリーが最上階にありました。



【寮の様子。1週目の部屋も同じようなつくりでした】

### <注意事項>

・漢方の勉強も少しはできるかと期待したのですが、台湾では中医学と西洋医学では免許から違い、病院も違うため、西洋医学の医師が漢方薬を処方することはないそうです。今回の病院はどれも西洋医学の病院なので、治療方針は基本的に国際ガイドラインに則っています。

・ホスピス見学をしたかったのですが、残念ながら機会を逃してしまいました。後で聞いた話ですが、自分があらかじめ希望した科以外にも、見たい科があれば案内してくれるとのことでした。

・私たちは半袖の KC を着ましたが、白衣は長袖の方がいいと思います。病院の中は冷房が効いており、台湾の学生も長袖でした。KC は台湾では一般的ではないようです。

・ちょうど梅雨の時期で、かなり雨が降りました。靴が濡れてしまい、乾くのに時間がかかりました。実習用の予備のスニーカーがもう一足あればよかったですと思いました。傘は折り畳み傘がとても便利でした。MRT などの駅でも売っています。

・学生が毎日のようにいろんなところへ連れて行ってくれるので、体力的には大変ですが、現地の人の生活や文化、歴史を知る良い機会となりました。病院実習が主な目的と思い、観光ガイドブックは不要だと思っていましたが、持って行けばよかったですと思いました。どこに行きたいか提案すれば、向こうも計画に困らないと思います。

・両替は、現地でしたほうが利率はいいです。しかし、銀行だと 15 時ごろになってしまうため、なかなか両替する時間がありません。到着した空港ですか、日本の空港で済ませておくのがいいと思います。今回ははじめに 4 万円両替しましたが、いろんなところに行きお金が足りそうになかったため時間が空いた時に銀行で両替をしました。銀行によっては利率が違い、手数料なども取られる可能性があるため注意が必要です。

・いくら物価が安いとはいえ、観光客向けのお店(マンゴーアイス、鼎泰豊など)は日本と同じくらいの

料金設定で、長く現地に滞在していると高く感じます。現地価格で済ませたい時は、学生おすすめのお店に連れて行ってもらいました。

- ・ビニール袋は持って行くと重宝します。コンビニで2元だせば袋がもらえますが、大きなのは無いようです。

## 輔仁カトリック大学臨床実習報告書 # 2

### ○準備編

- ・航空券は出発約 2 ヶ月前に西鉄旅行(株)を通じて、エバー航空で予約しました。もう少し早くから予約すると、よりお得になります。
- ・台北市内は公共施設や公共交通機関の駅などで free wi-fi がますが、より連絡を簡便にするために、携帯電話は sim フリー化して渡航しました(au のみ不可。約 3000 円)。
- ・福岡空港で約 4 万円=NT\$10000 を両替しました。
- ・台湾のプリペイド sim(中華電信)は桃園空港で購入が可能で、データ通信無制限(通話可能)で NT\$1000 で購入し使用しました。

### ○國泰総合醫院(1 週目)

#### [実習]

血液内科は病棟回診、入院時カルテ記載見学、血液像・輸血についてのレクチャー、外来見学、緩和ケア病棟見学が主な実習でした。疾患の治療法は日本と差はなかったのですが、ベッドサイドに患者さんの疾患名が英語で記載されていたり、回診中に治療方針の IC をしたり、電子カルテを個人のタブレットやスマートフォンで閲覧が可能だったり、個人情報についてややずさんな印象を受けたことが日本との大きな違いだと感じました。台湾では母の日をより大切にすることで、入院患者さんと家族に対して母の日の記念品を渡すことができました。國泰病院では「愛護人員」というボランティアさんが病院におられて、身寄りのない患者さんの身辺ケアをされていて、日本にはない光景でとても印象深かったです。

水曜日は分院で緩和ケア病棟の見学でした。緩和ケア病棟には、祈祷室が備えられ、宗教家もカンファレンスに参加し、患者さんの精神ケアにあたっていました。お会いしたのはチベット仏教の僧侶さんでしたが、他宗教の信者さんでも話を聞き、患者さんの背景や考えを理解し、寄り添うことでケアを行っていくと伺いました。治療のみに目を向けず、患者さんに寄り添い、話を聞くことが大切だというメッセージが最も印象的でした。

#### [日常編]

- ・台湾到着後は伝統的な台湾料理店(結婚式場のレストラン)で Prof.Yip ら教授陣や学生との歓迎パーティが行われました。先生方へのお土産はこのタイミングでお渡ししました。
- ・Prof.Yip から NT\$500 がチャージされた easy card(交通系 IC カード)と記念品を頂きました。
- ・病院の寮は、エントランスは電子錠、部屋は 4 人部屋。布団はフカフカですが、シャワーとトイレはあまり綺麗ではないです。

- ・洗面具(スリッパ、洗面器、トイレットペーパー、タオル等)は各人にプレゼントされ、寮の机に準備してありました。そのため、シャワーは支給されたスリッパのまま浴びました。
- ・寮の洗濯機・乾燥機は無料で使用可能でしたが、乾燥機の乾燥性能はあまり良くなく、4～5時間乾燥に要しました。
- ・寮は分院のある汐止にあり、本院(台北)までは分院からシャトルバスで通いました。寮の付近は交通の便は悪いです。(シャトルバス内は飲食禁止)
- ・國泰病院は國泰財団(おそらく銀行業)の病院で、複数の建物に病棟がまたがっています。地下道で病棟がつながっています。
- ・毎日お昼には弁当が支給されます。初日に箸やスプーン、弁当カードが支給されるため、午前中は箸なども白衣に入れて持ち運ぶ必要があります。(弁当は900kcal超え)
- ・院内にはwi-fiが完備されています。
- ・実習初日の夜は3週間、お世話をしてくれる学生(約10名)が集合し、学生同士の歓迎会があります。学生へのお土産はこのタイミングで渡しました。
- ・学生との歓迎会では日本の歌を披露してくれと頼まれて歌いましたが、かなり好評でした。
- ・実習後は台北市内の観光(101、夜市、マンゴーアイス、タピオカミルクティーなど)へ行きました。学生が案内してくれたときは毎晩22～23時頃に、佐大生のみで観光の日は最終のシャトルバス(20時)で帰りました。
- ・夜市や買い物では様々なものをオススメしてくれます。購入する気がないときは早めに断りを入れないと、学生はずっと決断を待っていてくれて申し訳なくなります。
- ・台湾の5月は梅雨で、高湿のため、どこでも冷房が効いています。最初の1週間は半袖では寒く、現地の学生が長袖の上着を貸してくれました。

## ○輔仁大学(5/10,5/15)

### [実習]

5/10は輔仁大学でOSCEを受けました。台湾では4年修了時に基礎、6年修了時にOSCE、7年修了時に国家試験という3段階の試験をクリアして医師免許を取得します。そのため、輔大の6年生はピリピリと緊張した雰囲気の中でOSCEを受けていました。

OSCEの基本的な流れ、方法は日本と変わりませんが、12個のステーションのうち4つは手技(縫合など)のステーションであることや、各ステーションでフィードバックをその場で聞くことができるという点は日本と違っていました。また、輔仁大学では3年生以降は毎年、学内でOSCEを実施しているそうでした。

私は精神科、復健科(リハビリ科)のステーションを受験しましたが、精神科では「統合失調症の患者家族への病状説明」、復健科では「C7領域の頸椎症の診断」でした。医療面接は何度も経験して自信はありましたが、家族説明や疾患感度・特異度の高い身体検査は大学でも経験しないため、とても難しかったです。「問診は問題ない。」「疾患感度・特異度の高

い検査をすべきだ。」「薬の副作用についてもっと詳しく説明すべき」といったフィードバックを受け取りました。7年生で研修医となるため手技や家族説明にも踏み込んだ OSCE が行われていたのだと思いました。

5/15 は輔大・日本語文学専攻の学生の案内のもと輔大の施設見学を行いました。私立の総合大学ですべての学部が同じキャンパスにあるため、雰囲気は福岡大学のようなものでした。

医学部長にお会いしたり、Prof.Yip から記念品をいただきました。輔大の歴史資料館や解剖室、OSCE センターの見学を行いました。カトリック大学なので歴史資料館には歴代学長の司祭服等が展示してあり、驚きました。解剖室は佐賀大学とほぼ同様の設備でしたが、解剖の様子を全員で供覧できるように天井ビデオカメラ設置してあったり、スライスされた解剖標本などがあり、より解剖学習が行いやすい環境でした。解剖学の教授のみでなく、外科医も解剖実習に参加し、学生に指導するという話もとても魅力的でした。

解剖実習にご献体された方々への追悼式典の様子もカトリック様式でとても印象的でした。ご献体された先生方は、解剖室の廊下に生前の様子がパネル展示してあり、尊敬の意識はとても強いのだと感じました。

#### [日常編]

- ・ 輔大の学食には輔大特製メロンパンが販売してあります。有名な一品らしいです。
- ・ 輔大の食品科学科がつくるソフトクリームも有名(これを食べずして輔大に来たとは言えないらしい)で、とてもおいしいです。
- ・ キャンパス内には輔大グッズも売ってあります。
- ・ 輔大は図書館や OSCE センターなど、試験勉強を行うための施設が充実しており、学生が存分に活用している印象でした。

#### ○耕莘醫院(2 週目)

##### [実習]

一般外科での実習は早朝の病棟回診と手術見学が主な実習でした。一般外科のチーフが乳腺の専門だったため、乳房の腫瘍摘出の手術が主でしたが、甲状腺摘出術、胆嚢摘出術の見学を行いました。手術手順などは日本と同様で、大きな違いはありませんでしたが、乳腺疾患の患者さんはとても多かったように感じました。背景には台湾の高エネルギーの食事(砂糖の多い飲み物など)が引き起こす肥満が根底にあるように感じました。また、耕莘病院は地域中核病院であり、救急搬送がとても多かったように感じました。警察車輛が停車していることも多く、交通事故が多かったようです。台湾の交通マナーは悪く、歩行者が横断中でも車輛が交差点に侵入したり、バイクが歩行者の間を縫うように走行しており、交通状況が事故の大きな要因になっているようでした。

最終日は国際脳外科学会理事長の先生(台湾大学)と脳外科のケースカンファレンスに参加



しました。有名な先生とのケースカンファレンスはとても難しかったですが、鑑別疾患や自分の考えをしっかりと伝えられて、よい経験が出来ました。

#### [日常編]

- ・1週目の病院実習が終わると、荷物をまとめて寮を移動しないといけませんでした。耕莘病院は台北の南に位置しており、台北市内への交通アクセスはあまりよくありません。

- ・寮は輔大7年生のインターンと同部屋でしたが、両国の食べ物を交換したりと仲良く過ごすことができました。

- ・寮のバスルームは國泰病院に比べて清潔でした。洗濯はNT\$20、乾燥機は40分NT\$10程度でした。寮は精神科病棟の一角にあり、電子錠でロックされています。

- ・1週目に比べて観光は多くはありませんでしたが、野球観戦や蛍を見に行ったりと、少し遠くに行くことが多かったです。

- ・病院の手術室は室温18℃ととても寒かったです。

- ・手術中は先生から、とても難解な解剖学の質問をされました。インターネットを使用して、質問の答えを見つけ出さないと行けないため、台湾の通信回線を使えとすごく便利でした。

#### ○新光呉火獅記念醫院(3週目)

##### [実習]

腎臓内科の実習は、エコー実習、外来見学、病棟処置、透析見学、低K血症についてのレクチャーが主でした。腎臓内科の実習は自由で、循環器内科へPCIを見学に行ったり、胸腔内科での胃管挿入の見学へ連れて行ってくれました。

台湾は糖質の多い食事のため、糖尿病を原因として透析導入となる患者さんが多く、導入率は世界ワーストでした。また、血液透析の患者負担額はとても安いため糖尿病コントロールは悪く、国家の医療費も莫大な量になっていることを知りました。また、台湾の人々は体調不良があると、軽度の疾患でも全員が救急外来を受診するため、廊下までストレッチャーがずらりと並んでおり、救急部はとても疲弊しているとのことでした。

新光醫院では研修医やレジデントと話す機会が多く、日本との医療制度の違いについて話すことができました。台湾の学生の診察技術は個人差がとても大きいことに驚きました。1週目の病院では呼吸音を心尖部2ヶ所で聴取し、腸蠕動音を3ヶ所で聴取していたりしていましたが、新光醫院では、シミュレーターで練習したあとであれば、胃管挿入や血液ガス、気管挿管も学生が行うことができました。台湾では7年生は医師免許がないまま研修医として勤務するため、手技の熟練度は個人差がとても大きいようでした。様々な手技を学生のうちから行えることは少し羨ましく思いました。

#### [日常編]

- ・新光醫院は台北の北部に位置しており、士林夜市のすぐそばに病院があります。移動日初日は寮のクリーニングが済んでなかったため、移動初日(土曜日)は研修医当直室に泊まりました。
- ・寮は4人部屋、3週間で最も清潔で、男子部屋はウォシュレットがついていました。布団は敷布団にすだれのような竹が一面に縫いこんであり、板の上に寝るような布団の硬さでした。
- ・洗濯はNT\$20、乾燥機は40分NT\$10で使用可能でした。ゴミは地下にゴミ箱があるため、定期的に捨てるに行く必要がありました。
- ・寮と病院は歩いて約10分程度離れています。病院⇄寮⇄MRT 駅を巡回するシャトルバスがあるようですが、歩いたほうが早いと思います
- ・病院は地下に外来、地上に入院病棟がありました。毎朝7時半頃から内科カンファレンスで様々な分野のレクチャーがありました。
- ・昼食は現地学生が病院付近の食堂へ連れて行ってくれます。平日は夕方から観光へ出かけていました。
- ・観光は休日に九份、故宮博物館へ、平日は淡水や夜市に行きました。

#### ○帰国編

- ・帰国前日はお土産を買い、現地学生のお宅でTVゲームなどをして過ごしたあと、台北の夜景を見に行きました。
- ・お土産は、買いたいものを現地学生に伝えておくとお店を探してくれたり、紹介してくれたりします。
- ・朝8時の便で出国予定だったため、輔大の職員さんに送ってもらい、5時半に寮を出発し、6時に桃園空港到着でした。(レンタカー NT\$1300/グループ or タクシーで台北まで出た後バスで桃園の2択)

#### ○その他

- ・台湾では漢方や鍼は医師免許と別の中国医学ライセンスが必要なため、普段の診療では見られないことが多いです。(今回の留学では見学することはできなかった。)
- ・ハンガー、トイレットペーパー、ゴミ袋などの日用品は寮には備え付けでないため持って行ったほうがよいです。特にビニール袋は必需品です(コンビニなどではビニールをもらえないため。)
- ・台湾のMRT(地下鉄)は改札付近、車内、プラットホームを含め、飲食禁止です。(NT\$7500の罰金)
- ・輔大の学費は年間約NT\$150000で最も学費が高く、台湾の国立大は約NT\$100000くらいらしい。
- ・7年生(研修医)の研修先は成績順で決まるらしいです。また研修医はNT\$25000/月、医師

は約 NT\$100000/月の給料を貰えるそうです。(台湾の大卒初任給が約 NT\$20000/月程度らしい)

- ・福岡空港で両替して渡航しましたが、福岡空港のレートは良くなく NT\$1=JPY4 程度でした。最もレートがよいのは桃園空港、次いで台湾の銀行らしいです。(台湾の銀行は NT\$1=JPY3.5~3.7 程度)

- ・福岡で 40000 円を両替し NT\$10000 を持って行きましたが、3 週目で足りなくなり追加で 10000 円を台湾の銀行で両替しました。お土産はクレジットカードのほうがレートがよいです。

- ・現地学生が誕生日を迎えたため、NT\$2100 の腕時計をみんなでプレゼントしました。

- ・sim フリーにしておくとても便利でした。学生同士で電話連絡が可能なのでくれた時間も安心です。

- ・LINE、Facebook をよく使いました。現地学生は英語のニックネームがあるため、ニックネームを考えておくにより親しみやすくなります。

- ・3 週目の中ごろに Prof.Yip から 3 週間の感想文をメールで提出するように言われました。グループでプレゼンだと聞いていて、ノート PC を 1 台しか持って行っていなかったため、少し不便でした。タブレット端末+キーボードか、ノート PC を持っていくとよいでしょう。

	NT\$(NT\$1=JPY3.7~4)	クレジットカード(NT\$)	JPY
航空券			55600
食費	7100		
交通費(MRT、バス、電車)	800		
新幹線	295		
雑貨	300		
足つぼマッサージ(40分)	500		
台北101	450		
野球チケット	250		
温泉	400		
simカード	1000		
お土産	1600		
お土産		4200	
※誕生日プレゼント		2100	
合計	12695	6300	55600

## 輔仁カトリック大学臨床実習報告書 # 3

留学期間 2014/05/5~5/23

留学先病院

1 週目：Cathay General Hospital

2 週目：Cardinal Tien Hospital

3 週目：Shin Kong Wu Ho-Su Memorial Hospital

今回の台湾交換留学に参加することになった経緯についてここで少し書かせて頂こうと思う。昨年の夏に友人数人と台湾旅行に行った際に、一人の友人が台湾の知り合いが観光案内してくれるので、待ち合わせをして会おうと言った。現地に知り合いがいるなんて知らなかったし、どうやって知り合ったのか疑問だったが、実際に会って話をしてみると、彼は台湾の医学生で、どうやら佐賀大学に交換留学で来ていたということだった。彼が日本に滞在中には佐賀の学生にお世話になったからということで、僕らが台湾に滞在中は旅行計画と案内を申し出てくれて、想像以上に充実した旅行になった。この旅行が海外の医学生を初めて意識し、身近に感じたきっかけだった。もっと彼らと話したいと思っていた矢先に、台湾への交換留学生募集の張り紙をみつけた。旅行中に台湾に好感を持ったことに加えて、旅行では経験できない現地の方との交流があるのではないかと思い、希望書を提出し留学に参加させてもらうことになった。

僕は台湾語を全く話すことができなかったのですが、必然的に英語で意思疎通を図ることになったのだが、台湾の学生、医師は思った以上に英語が流暢だった。台湾の医学生は基本的に英語の教科書を使用するらしく、疾患や症候、検査や解剖にいたるまで当然のように医療英単語を使っていた。また、病院のカンファレンスで使用される発表用スライドは全部英語だし、日本の留学生が来ているからということで議論も全て英語でやってくれた。これらを経験して思ったのは日本の医療現場が英語に対して必要以上に壁を作っているということだった。日本の大学にいても、医学英語の重要性に関してはよく言われているし、英語論文を読めないと困るので今のうちから英語を勉強しておくように忠告を受ける。しかし、論文を読むときに辞書を引きながら英語を勉強する日本と、普段から情報源として英語で書かれたテキストを使い議論する台湾では大きな違いがある。そういう環境に置かれた僕ら日本の学生が台湾にいて英語を使って学んで来るように言われて、現地で英語力の無さに劣等感を覚えるのは当然なのだが、そこに気付くことができたのは大きな収穫だったと思う。もちろん、留学前には医療英単語を勉強していったが、普段から使いなれている台湾の学生との間にはやはり大きな差を感じた。

また、一般的に日本人と比べて外国では意見を主張することが大事だと言われるが、台湾の学生もそれぞれ自分の意見を持ち、また同じように他人にも意見を求めていた。その

一つとして、台湾の学生から日本と台湾の医療の違いに関して意見を求められることが多かった。僕が見たところ大きな違いはないように思えたが、やはり日本の医療についてもっと知らなければ、海外に出ても学び得るものが少なくなるし、海外の学生、医師との情報交換が内容のあるものにはならない。日本の医療について質問されて改めて自分の無知を自覚した。

3週間の交換留学を終えて帰ってきたときに頭に浮かんだのは、異文化の医療現場を見学し学んだことや感じたことを今後に生かし、周りと共有する必要があるという責任感だった。日本だけでなく海外の医師と医療情報を共有するためにまずは自分の国の医学を学び議論できるだけの知識を蓄えること、またその際に言語が障害とならないように英語を学ぶ必要がある。医療情報源が日本語で豊富にあり、英語を必要としない点では僕らは非常に恵まれているが、日本語で得た知識を英語に変換する必要がある。将来において学会などで海外の医師と議論する際にはそれが大きな障害となってくると感じた。そういった反省を生かして、帰国してからの大学での臨床実習では、学んだことを人に伝えられるように意識することでより深い理解を得られるようになった。さらに、疾患や症候の医学英単語が気になるので辞書で調べる習慣がついたし、文献を調べる際には英語論文を読んでみようと思えるようになった。

最後に、台湾でお世話になった現地の学生や医師に感謝したい。彼らは非常に好意的で親身になって僕らの世話をし、絶えず気にかけてくれた。僕らの病院実習の大半は現地の5年生につく形だったので一日中一緒だったし、自由時間には自ら観光案内してくれた。日本から来た留学生になんとか台湾を楽しんでもらおうとする意図が感じられてそれだけで嬉しかったし、その心意気に感動した。

## 輔仁カトリック大学臨床実習報告書 # 4

### きっかけ

- ・ 入学当初から英語が嫌いで、入学後もろくに英語を学んでいなかったが、学年が進むにつれて英語の能力を問われるようになった。しかし、急に海外に行ける程英語の能力が向上するわけでもなく、なにかきっかけはないかと探している時期であったこと。初めて、台湾での実習の話聞いたとき、台湾人なら英語のネイティブスピーカーでもないし、何とかなるのではないかと思ったのが今回の実習につながった。

### 台湾実習についてのまとめ

- ・ まず始めに言うことがあるとすれば、台湾での実習はいわゆる「国試」の勉強のために行ってはないということ。外来は当然台湾語で行われるし、たとえ英語でフォローが入ったとしても効率は落ちてしまう。夜は当たり前のように観光&観光。国試の勉強になるようなことは何一つないと言っても過言ではない。学べることは**台湾と日本の医療の違い**。英語。コミュニケーションの取り方、台湾の歴史、生活などなど。  
しかし、私がもし、「もう一回行くか？」と問われたならば、喜んで卒試の前の3週間でも行くだろう。他に得るものがとてつもなく大きい。そんな3週間でした。

### Cathay General Hospital

#### 5月4日

朝12時20分の飛行機に乗るために、朝6時に起床。7時間30分の佐賀駅行きのバスに乗り、そのまま高速バスを使用して9時50分に到着。

空港で台湾の人へのお土産（煎餅4つ。もち2つ）を購入。飛行機は2時間30分位で到着。機内食の肉じゃがとご飯はおいしかったが、野菜がまずかった。桃園空港では台湾の学生が迎えにきてくれており、マイクロバスをレンタルしてくれていた。

その後一時間ほどで寮に到着。寮の外見はマンションの様だったが、部屋はまだしも洗面所は刑務所かと思った（電気は切れているし、水はうまく流れない。）

6時から大学の教授と結婚式場の中のレストランで会食。あまりおいしくはない（一番最初に食べた台湾料理であったので、これからの3週間が不安になった）。とくに肉。スープ類は比較的油い。病院の外観が印刷されたPASMOの様なもの（500元入り）をいただいた（これが一番の贈り物であった。これがあると移動がずっと便利になる）。

寮の周りにはスーパー、セブンイレブン、ファミリーマートなどなんでもある。キッチンの様なものもあるが、お湯をわかす程度しかできない。洗濯物は洗濯機が共用フロアにあるので心配ない。

シャンプーやリンスを買っていたが、スーパーにアジエンスなどが普通に売っている。向こうの病院が準備してくれた、洗面用具（桶、シャンプ、歯ブラシ、タオル、コップ、スリッパなど）があった。

5月5日

朝6時30分に起床。セブンイレブンにておにぎり購入。

8時から汐止医院からでるバスで本院へ。本院前では先日の学生四人が玄関で迎えてくれた。その後、日本語のできる劉先生（20年前に東京医大で研究）に軽いオリエンテーションと記念品贈呈をしてもらい、各自の科に分かれて実習。血液腫瘍内科の実習で新たな学生と出会う。彼らも5年の学生であり、まだ慣れていない様子。学生の仕事として最初に行っていたのは admission note をまとめて、患者さんに問診、説明をすること。その際、指導医も見守っている。驚いたのは患者さんの枕元のプレートに病名が英語でかいてあること。

そのご昼ご飯（病院が用意してくれたもの。カロリー900以上）。昼からはカルテをまとめて台北101へ。台北101の散策にも多くの学生が参加してくれた。

6時30分から学生の誕生日会も兼ねた歓迎会。そこで初めて交流のとれた学生も多かった。台湾の学生の英語のうまさと、日本についての知識に驚く。日本のドラマ、有名人などは台湾でも有名ならしい。適当な話をしている中で、たまにまじめな話が入ってくる（議事堂占拠について、原発について。）台湾では小さいコップでお酒を飲み、乾杯しても半分くらいあけるだけなのが助かった。そこの台湾料理はとてもおいしく、どれもご飯がよく進んだ。お酒が入ってくると、片言の英語でも強気ではなせるようになり、コミュニケーションがとりやすかった。国は違えど、笑うポイントにそれほど違いはない。

飲み会は10時まで行われ、電車で送ってもらいその日は終了。

5月6日

朝7時起床。目覚ましがうるさいと先に起きた人にキレられる。バスに乗って、病院の外にある木村屋（日本式パン屋）で中華式サンドウィッチを購入。

九時より教授回診。回診自体は日本のものと大差ないが、いろいろな業種の人と一緒にまわった（心理士 看護師 リハ）。その後、**輸血についての講義**を英語で行った。輸血、血液型についての講義で、台湾では E phenotype も重要らしい。また、A,B型が最も多い。輸血の保存期間は、日本の21日と違い35日。ほかにも台湾特有の血液型があるらしい。学生は質問の時は台湾語であったが、そんなに熱心ではない。オスラーは昨日の誕生日会疲れで寝ていた。

講義の後は昼飯（昨日と同じ。チキン）。昼からは1時よりカンファレンス。私達に配慮してか、英語で発表していた。普段は講義も発表も台湾語らしい。

実習はここまでで、3時よりマンゴーかき氷を食べた。台湾の学生は二人で一つを食しており、だまされた。とてもじゃないが、一人で食べられる量ではなかった。次は観光地として有名な龍山寺に行った。パンフレットによると大戦中の空襲のときも爆弾が落ちなかったらしい。ここで驚いたのは、カトリックの学生が宗教観の違いを理由に入らなかったこと。寺の後は夜市で麺類を食べたが、台湾料理で一番おいしかった。観光中はみんないろいろ説明してくれ、会話が途切れることもなくとても楽しめた。ご飯の後は、40、50代のおばさんが客引きしているところや、蛇、スッポンの店を回った。皆とても親切で、何か自分たちが食べやすいものをと必死に探してくれた。

感じたことは、台湾の学生の親切さ。自分が、台湾の学生を受け入れたときにあんなに親切にできることができるだろうか心配になるほどであった。そして、台湾の学生の英語に対する意識の高

さ。失敗を恐れないのか、とにかく英語でしゃべってくる。日本人なら、通じないことを恥じてどうしてもできないことだ。

5月7日

今日は朝が10時からということで、朝ご飯を食べに行った。三明治がサンドウィッチの意味らしい。10時半から汐止病院のホスピスにて、台湾での治療についての講義を受けた。台湾の学生は5年生でまだ、WHOの徐痛ラダーについては知らない様子であった。11時からCFに参加。どこの国でも家族の間の問題や、遺産問題がつきまとうことがわかった。先生がニコニコしながらiPadを渡してきたので、何か教えてくれると思ったら、ハウステンボスの画像で、今日は午後一の飛行機でここに行くと言っていた。昼ご飯は地元の食堂で、台湾伝統料理のコラーゲンの包みとお粥を食べた。2時からチベット僧侶が行っているスピリチュアルケアの話聞く機会があったが、とても興味深いものであった。

- ・ ここにいるのは10年前に前の病院に呼ばれたことが原因。先生が信心深い方で、是非にと言われて始めたこと。
- ・ 伝教などはせず、何を信じているにせよ、求める人すべての人を相手にしている。ホスピスにはキリストの教会のような場所もあった。
- ・ やることは、スピリチュアルな助け。患者さんによっては「なんで私が」と言ってくる方も多いが、そういう人にこそ必要なこと。「多くの人、体と頭が離れてしまっている。」という言い回しをされていた。
- ・ 全身赤いものを身にまとっているのは、赤がチベット僧侶にとって、太陽とブツタを表しているから。
- ・ 仕事の内容はブツタの教えに従っている。
- ・ こうすることはボランティアでもあり、自らの修行でもある。
- ・ 死は輪廻のひとつである
- ・ もっとこういう宗教者がホスピスに必要である
- ・ ラマはマスターのことであり、本当は一人しかいないが、時の流れで紅い服の人のことを言うようになった。

その後基隆観光に出かけた。

ここの夜市は日本語ガイドもあり、すべてがおいしかった。なかでも、野菜や鳥を汁でまぶしたものは絶品であった。ここでも、オスカーがいろいろとリーダーシップをとってくれた。

5月8日

今日は〇〇（一緒に行った友人）が5分早く起きただけで、ドヤ顔が半端ないことから始まった。朝は、サンドウィッチをいつもの店（近所の中華式三明治屋）で食べた。ここまで来ると台湾での生活も落ち着きを見せ、いつもより一本遅い8時30分からのバスでも間に合うことがわかった。朝の回診は途中から参加した。驚いたこととしては、皆（医療関係者、同室の患者さん）の前で治療法の説明をし、どの治療にするのか選択を求めていることが印象的だった。

途中の学生との会話で、台湾の医師国家試験の合格率が60%位なのは、中国や、フィリピンの大



学に学びにいつている学生が帰ってきて試験を受け、大半が落ちることが原因らしい。

それにしても皆の優しさが素晴らしい。明日も、予定外のお昼を企画してくれた。昼からは学生が他の病院で講義のため、ホスピスで母の日の催し物を手伝った。先生自ら、フォトプレートの作成にも携わり、記念撮影や、枕のプレゼントなどもしていたのが印象的だった。このような催し物は、他に父の日とクリスマスがあるらしい。明石拓郎は中国語でリーシン・トーランと読むらしい。ホスピスでは、夫婦で隣のベッドで入院しているかたや、涙ぐんで喜んでくれた方が印象的で、台湾も **OMOTENASHI** の心にあふれていると感じた。

夜は、日本人だけで有名な点心を食べにいった。日本人向けの店であり、500ドルもとられた。地元の学生のおすすめの店の素晴らしさを改めて痛感した。

5月9日

今日はなんとか早起きをして、7時40分にいつもの店に。

今日も午前中は回診へ。ここではいつも通りだったが、最終日にして初めて患者さんの病名の書いた紙をいただいた。

お昼は麻油鳥のスープを食べに外へ、腎臓を食べたが美味しかった。

午後は、教授の部屋で**病理組織**を見せていただき、学生に通訳をしてもらいながら、格白血球を見て回った。台湾の学生の知識は5年生であることを考えても、まだまだだと思った。

その後、名札やアンケートを返して今週は終了となった。

夕方は、蒋介石記念館を見物。

途中で台湾の**7年生**に遭遇したが、7年生は日本でいう研修医の様なものであり、インターンとして働くのでほんの少しお金がもらえるらしい（学費が賄える程度と言っていた。）

## Cardial Tien Hospital

5月10日

今日の朝は少し寝坊したためセブンイレブン。

9時にシュレックが迎えにきて次の病院へ。電車とバスを乗り継いで、一時間ほどで到着。ルームメイトに中国人がいたが今日は会えなかった。

そのご、シュレックとデイビットとともに **OSCE 受験**のためにフージェン大学へ向かった。

昼は大学の前の鉄板焼きを食べる。

台湾には**11の医学部**があり、彼らの大学は一学年**45人**だが、多いところは**100人**ほどらしい。

### OSCE

- ・ **精神科**と**整形外科**を行う。
- ・ やり方は日本と同じだが、**学生は6年時に12のセクション**も受験
- ・ 精神科は、「**統合失調症**で入院した息子を心配する母親」という日本にはないもので、母親に**病状と今後の対応を説明**するものであった。どうすれば良いのか分からなかったため、無理矢理いつもの OSCE の路線に戻ってしまった自分が情けない。評価では、一定の評価をもらえたが、母親はかなり緊迫した状態にあり、もう少し詳しい話を説明するようにといわれた。

- ・ 整形は**首の痛み**を訴えたおばさん。いつも通りの一通りの問診を行った後、身体診察もおこなったが特に問題なく終了した。
- ・ 日本語通訳をしてくれた方の一人に、お姉さんが日本語を専門にしており、自分は7年生で2、3ヶ月日本語を勉強し、その後日本のドラマやライトノベルで勉強したという人がいたが、日本語のうまさに驚いた。

5月11日

朝の7時に目覚ましが鳴ったが、また敏感な二人が起きて文句を言っていた。

今日は日曜日なので、朝の10時30分にバスで出かけ、中正記念堂へ。先にソーソーおすすめのビーフヌードルを食べた。ここは日本人向けの本には載っていないところらしいのだが、かなりのおいしさであった。今日の案内人はオーランドとソーソー。台湾は母の日も盛大に祝うようで、中正記念堂の建物の中で衛兵交代式を見ることができた。その後、夜に再び行ったときは、かなり多くの人が集まっていた。今日は何の宗教なのかは分からなかったが、いわゆる**洗礼**があったようだ。その後、2.28記念平和公園に。そこではソーソーの説明がよく聞けた。2.28事件は台湾では**大きな歴史の分岐点**であったようだ。そこで飲んだプラムサワーは後味が薫製の様な味がしたが、なかなかおいしかった。次は、台湾自然博物館と博物館へ行き、恐竜の骨などを見て回り、何かのチャリティー広場で大道芸を見た。それにしても今日は暑かった。次にいく学生には、梅雨の時期は寒い日と暑い日を考えてどっちも持ってこさせるようにしたい。また、二個目の寮では服を入れる用のかごなども準備しておくべきだろう。夜はソーソーおすすめの小籠包を途中から参加したキャシーと食べた。日本人向けの店ではなさそうだったが、かなりおいしかった。

台湾人はかなり屈強なのか、どれだけ歩いてても疲れを見せる様子がなく、驚いた一日であった。

明日からの病院は台湾の中でも**貧民に近い方が患者として多い病院**であるようだ。見た目としては特に前の病院とはかわらなかったが、**何が異なってくるのか**しっかりと観察して、その違いを押し返せることができれば実習としては合格ではないだろうか。

5月12日

朝寝坊気味に起床。朝の6時に目覚ましがなったようで、△△（一緒に行った友人）がきれてベッドをわたって起こしにきたらしい。

朝7時50分にリンジーと会って、事務室まで連れて行ってもらった。その後、皆で朝ご飯を食べたが、そこで家庭科と一緒に回ってくれることになった台湾の学生が、少し日本語をはなせるように助かった。

家庭科事態の実習は、**午前中は普通の外来**が行われ、ほとんど**中国語のみ**であったので意味が分からなかった。外来の形はほとんど日本とかわらなかったが、**ものすごい人で込み合っており**、前の病院との違いなのかと感じた。とりあえず、□□さん（一緒に行った友人）の英語力が半端ないことが分かった。お昼も家庭科のメンバーと地下の食堂で食べた。

午後は、12時30分より**福山に往診**（主に**少数民族が住む地域**）に出かけた。車で1時間30分ほどの距離にあったが、少数民族の町の想像とは違い、電線も、車もあり、普通の田舎町というイ

メージであった。ただ、福山に入る前にゲートや関所のようなものが形だけは残っていたので、もしかしたら昔は隔離されていた地域なのかもしれない。最初によったのは民家で、そこで一通りの問診などを終えて診療所に向かった。診療所に常勤の医師はおらず、週一回の往診意外に医師にはかからないようだった。緊急疾患の場合も、電話してから病院までに往復で二時間はかかるため、かなり危険な地域であると感じた。村と台北を結ぶバスも三日に一度しかないらしい。また、村の正確な人数も把握されていないようで、山の奥にすんでいる人の人数は分からないままだと言う。少数民族の方は、保護政策の一環なのかわからないが、医療費がすべて無料であるらしい。最近はお医者さんショッピングに走ったりしていることが問題らしい。また、少数民族の人は注射の方が効くと思っている人が多く、多くの方が注射をうってほしいと言ってくるが、ここではできないので麓の町の病院に行くように言うらしい。

病気としては、高血圧とアルコール中毒が多く、通風をほったらかしにして、手の先までごつごつに腫れた人が来るのも珍しくないらしい。アルコール中毒が多いせいか、奥さんへのDVを働く人もいるとかいないとか。

次の診療所では、ほとんど患者さんがこず、外の町並みを見学していた。ムササビの干したやつが衝撃的だった。その後、少数民族の伝統の鳥の丸焼きを購入し、皆で食べた後に、デザートにかき氷のようなものを食べて終了した。

5月13日

朝9時からであったので、〇〇と△△を先に行かせて優雅に準備をした。

今日は外来しかないらしく、午前中はシスターの資格を持つ先生の外来について。そのせいか、患者さんにも何人かシスターの姿が見られた。どうやらシスターも安心してこの先生なら見せられるようで、主訴がなんであっても最初にこの人のところに行くらしい。今回きたシスターの中には、主訴が歯の痛みだという人もいた。驚いたのはこの人たちはアルゼンチンの人たちで、それでも保険証のカードを持っていたことである。聞いたところ、ある特定の職種で台湾に滞在する人は、国民保険に加入することができるとのこと。また、先生は乳がんを専門にしているらしく、乳がんのスクリーニングテストの触診のやり方を教わった。外側から囲うように触っていき、さいごにつまんで二ボアの存在を探らしい。午前中の最後には、日本語がぺらぺらのボランティアの方が患者さんを連れてきたので、日本人なのか聞いたところ、戦時中の女学校で習ったとのこと。今の台湾に多くの日本語が根付いているのは、どういう過去があったにせよ、日本の文化と歴史的な出来事の結果なのだと感じた。特に、少数民族の集落には未だに多くの日本語が単語として残っているらしい。台湾占領下において日本の文化と少数民族の社会が出会ったとき、社会的交流の狭い少数民族の世界では、その世界にないもの全てを日本語そのまま受け入れたようで、カミサマ(神様)、テッポウ(鉄砲)などが良い例である。

お昼は医局でだされた春雨ヌードルの用なものを食べたがおいしくはなかった。そこではインターン(7年生)が読んだ論文の発表をしていた。乳がんのスクリーニングテストの有効性の論文であったが、パワポは英語でも話してる言葉は中国語なのでそこまで意味は分からなかった。

午後の外来では、ビンロウという台湾の噛みタバコで口腔癌になった患者さんを見ることができた。

ビンロウは台湾における伝統的な麻薬（厳密には麻薬ではない）の一種で、噛むことで一種の興奮を得られるのだが、口腔癌の活性率が爆発的に上昇するために、近年は禁止される方向に動いているらしい。特に高齢者で使っていた経験のある方が多いため、健康診断の問診票にビンロウを吸っていたか否かを問う項目があった。

5月14日

今日は朝の7時50分に集合して病院の外へ。ついたのは日本で言う**公民館**のような所。そこに高齢者の方が待っており、**血圧や血糖**を計るのを手伝った。最初に消毒を忘れたり、針のキャップが外せなかったりと醜態をさらす。ちなみに、これは病院に来られない人たちへの**無償奉仕**らしい。そこで先生に聞いたこととして、台湾で人気な科は**皮膚科 眼科 放射線**。一番ハードなのは**整形外科**。台湾の医師は二年前の制度変更で給料がだいぶ減らされたとのこと。しかし、医師の**社会的地位**かなり高いようだ。学生であっても、患者さんにうちの娘はどうかと写真を見せられるらしい。また、台湾において**医療ミスはすべて刑法で罰せられる**ため、すぐに牢屋いきだそう。午前はこれで10時まで終了し、昼は早めに近所の乾麺をいただいた。

午後は二時からの外来だった。途中、隣の部屋に**発熱のみ**できた人がいたが、問診をしたところ**ケニアへの旅行帰り**ということで、赤血球の染色をしたところ、案の定**マラリア**であったということがあった。

夜は野球を見に新幹線で行った。応援にふんだんに音楽を使いかなり盛り上がっていたが、人自体はかなり少なかったと思う。帰りにオスカーに誕生日プレゼントを渡して終了した。

5月15日

今日は朝の8時に駅に集合してベンジャミンとともにフージェン大学へ。

朝から日本語学科の女の子二人を紹介してもらい、かなり日本語がうまくて衝撃的だった。なんでも、一人は商社に入る様で、台湾では日本の商社が多いので就職には有利だそう。もう一人は日本で中国語の先生をしたいとのこと。二人は院生だが、院生は10人しかいないらしい。二人の案内で医学部の棟へ入り、そこでイップ教授と医学部長とあって、写真撮影などを行った。その後、イップ教授と留学証明書の授与と写真撮影、記念品贈呈を行った後に解放された。解放後、5人でしばらく話していたが、日本語での話についてくるところか、突っ込みや笑いを取ることもできる二人の日本語力にあぜんとした。

雨が少しやむと、留学責任者との食事に出かけた。そこで新たな日本語学科の二人と会ったが、最早ネイティブと言ってよく、絶対日本語教室では習わないような日本語も簡単に使いこなしており、聞くと、二年ほど日本で働いていたようだ。将来は、大学が新しく作っている病院に来る外国人医師、学生などのための職員の座を狙っているらしい。日本人の私にとってはこういう人がいたら、かなり心強い。ここで聞いた話だが、フージェン大学は自分の病院を持っておらず、学生は外の病院で研修をするらしい。二週間目で初めて大学での研修がない理由を知ったことが恥ずかしい。もう一人の学生はひよろ長い男の方で、俳句を書くことができたり、日本語の習熟度ではかなりのものであった。将来は学者になるらしい（写真を取り忘れたのが悔やまれる）。

5月16日

今日は朝九時から**外来**。8時30分に集合して朝ご飯。今日の先生は中国語で患者さんと会話するのに精一杯で、学生が必死に通訳をしてくれた。

昼はベンジャミンの**鼠径ヘルニア**の発表を聞きながらいただいたお弁当を食べた。

午後は三時から**脳神経内科と一般外科のカンファレンス**とクリスの**症例発表会**に参加。そこで、現在の**世界脳神経外科学会会長**の先生の講義を受けることができた。脳動脈奇形の話だったが、日本人の私にも分かりやすい英語で丁寧に教えてくださった。

夜は蛍を見にいった。山の中をひたすら歩く苦行はかなり応えたが、それなりに楽しかった。

## Shinkong Hospital

5月17日

今日は朝から次の病院へ。

新しい病院の寮がまだ準備できていないとのことで、まさかの**研修医室**での寝泊まりとなった。研修医室は日本の一般的なものと変わらなかったが、何故か地下駐車場の目の前に作られており、トイレにしてもお風呂にしても一回駐車場に出なくてはならなかった。

昼にこっちの病院の学生と鳥ご飯を食べた後に、故宮博物館へ。

その後、七林市場を見て今日は終了した。

5月18日

今日は朝7時に起床し病院内のパン屋へ。その後鉦山博物館へ向かい、砂金とりや坑道を見て回り午前中が終了。午後は歩いて九份に向かうも、道を間違えてあえなくバスに変更。九份ではいろいろと食べ歩いた。

夜にやっと寮に入れたが、今までで一番いい。綺麗で、しっかりとしている。

5月19日

今日は朝9時からだったので助かったが、結局ぎりぎりの時間になった。

新しい病院は立地、設備、患者からして今までの病院とかなり異なるらしい。主に富裕層向けであり、VIPルームなども存在していたが、学生は足を踏み入れることも許されていない。

朝ご飯に魚肉ソーセージ的なパンを購入したが、普通のソーセージだといわれ、どうやら魚肉ソーセージというものを知らないことが判明した。

この病院では主に腎臓内科を回ったが、朝は先生が暇らしく、講義を受けることができた。透析は日本と同じく、**保険で全額まかなえる**らしく、病院は3500ポイントを月に請求するらしいが、3200ポイントしか国からもらえないと嘆いていた。**個人負担は月600ドル**(一回50ドルの週3回)。この病院は国の中でも一番大規模な透析設備を誇っている。独自の基準として**TTKG**と**K/Cre**がこの病院では重宝されているが、使い方までは理解することができなかった。

昼は病院食堂で、意外とおいしかった。午後は外来だったが、2人見たところで終了し、病棟を見回り、4時から**台湾大学の先生**のありがたいCFを受けた。

夜は寿司を食べに行ったが、台湾の寿司は砂糖を何にでも乗せていて、触感ががりがりした。次に台湾名物だというエビつりに行った。台湾の女の子は料理をしないらしいが、針の外し方や、餌のつけ方には精通しているのか、エビも餌もわしづかみであった。

5月20日

朝7時30分集合。

朝から台湾大学出身の人の発表を見た。内容は台湾語であったので詳しくは分からないが、台湾の老年人口における鬱病の話であったようだ。台湾の人口構成は1983年に昔の日本のものと同じであったが、2011年にはかなり高齢化が進行しているところから察するに、日本より高齢化のスピードは早いようだ。また、65歳上の自殺率も10万あたり30人を超えていた。

お昼はかれんと外でラーメンとウーローハンを食べ、午後はPCIの見学。台湾の病院では中に入るのはほとんど医師のみで、看護師や技師さんはそとでモニター係らしい。また、使用するステントにも保険の効くものと効かないものがあるため、ステントを入れる前にどちらを使用するのかを聞かなければならない。ここで驚いたことは台湾の学生が本当に医療費やその周辺の出来事についていろいろと詳しいことだ。台湾でも医療費の高騰が問題となっており、先生からよく問われるらしい。

その後、VIPルームを見せてもらったが、外来からなにかいろいろと違った。先生や看護師は同じ人が対応するが、態度が違うらしい。また、救急で運ばれてきた人の大半が廊下にベッドを並べられていた（日本では見ない光景だが、台湾ではどこの病院でも患者さんが廊下に並べられたベッドで横になっており、そこで自分の番を待っている）が、VIPはいきなり個室に運ばれる。また、学生は問診にこない。

昼からは、昨日の外来にきた患者さんの治療についての検討を指導医（7年）と行っているところに参加させてもらった。日本でよくみられる一方的に聞くだけの検討と異なり、学生も真剣に意見を出している所が印象的だった。

5月21日

今日も朝は7時30分。

朝のCFはインドネシア帰りの人の発熱についてだった。

その後、いつも通りに外来とエコーを見た。外来は循環器の先生であったが、英語が聞きやすかった。台湾の先生は英語でカルテを書くのだが、それは昔の日本の先生がドイツ語で書くのと同じだと言われた。台湾は1945年までは日本語、それから英語になったらしい。この先生は外来で一日100人近くを見るのだが、どうしても一人当たりの時間を短くしなければならず、それだと患者さんの信頼をかえないということで、患者さんと同じモニターを見ながら台湾語でカルテを書いていた。

昼はお弁当をもらい3時から寮のそばの別館で透析の説明を聞いて今日は終了した。

夜は、お土産街にドライフルーツなどを買いにいった。

5月22日

今日は朝7時15分集合。朝のCFは医療統計における誤差を扱った内容であった。

その後、10階で患者さんのカルテを書くのを手伝い、スティーブンが胃管を入れているのを見守った。台湾の学生は指導医が見守っている中であれば、多くの手技をすることができるらしい。

昼から、台湾の学生がEBM (evidence based medicine) にでかけたので自分たちも終了した。

5月23日

今日は8時半集合。いつも通りにCFと外来を行い、最後に皆で近くの店でルーローハンを食べてお別れを言った。

夜は6時に東門に集合。他の病院に行っていた台湾の学生とのお別れ会を行う。店の後は近くの公園でお酒飲みながら談笑。最後に写真を取ってお別れを言った。

3週間と言う短い期間ではあったが、台湾の人の温かさを知るには十分な時間であった。本当にここにきて良かったと思う。

## 最後に

ここまでの私達が3週間で行ってきた活動の全てです。全てありのままを綴った日記をもとにしおり、なるべく手を加えていないので、実習に対する評価は人によって別れるかもしれません。

台湾の人達の温かさは掛け値なしに素晴らしいものです。毎日誰かしらが私達のために色々と計画を立ててくれました。このような機会を設けてくださいました、佐賀大学と、それを支えてくれた佐賀県に心よりお礼申し上げます。

3週間の間、台湾の医療に触れることで、日本の医療について客観的な視点を得ることができました。普段抱いていた日本の悪い所、良いところがより鮮明に理解することができるようになりました。